

2021 年度国際ユース作文コンテスト

【子どもの部】 佳作

## 私が考えるいのち

(原文)

塚原 碧衣 (12 歳)

茨城県

常総学院中学校・高等学校

ひとは、永遠に生き続けることはできません。命には限りがあります。

2 年前の 9 月に母の祖母が亡くなった時、私は福岡までお別れに行きました。会うといつも笑顔で優しくかった曾祖母は、もう二度と目を開けることはありません。私の手を優しくさすってくれることもありません。私は悲しくて涙が止まりませんでした。

命というものを考えているうちに、水泳選手で、東京オリンピックのエースとして期待されていた池江璃花子さんのことを思い出しました。急性白血病で倒れ、オリンピックどころか命まで危ぶまれながらも、二年間の闘病生活を経て復帰し、東京オリンピック出場選手内定という快挙を成し遂げたのです。どんなに辛く苦しい道のりだったことでしょう。私は、池江さんの、前を向いて歩いていく姿に胸を打たれました。

池江さんは、闘病中に、「命があること自体に意味がある」と考えるようになったそうです。死を目前にして闘った池江さんだからこそ言える言葉だと思います。

私の母は、食物アレルギーがあり、食べられるものに制限があります。私がお腹にいる時に白米とトマトやナスなどのナス科の食物が食べられなくなり、切迫早産で 5 カ月近く入院している間に、病院食がほとんど食べられないため、太るところか 8 キロも体重が減ったそうです。そんな苦しい思いをして私を産んでくれました。

私が生まれてから今日まで、母だけでなく、父も、祖父母も、叔父叔母も、皆が私のことを愛し、見守ってくれています。時にはうっとうしく感じることもありますが、心の底では感謝しています。

私は一人じゃない。周りを見れば、大好きな人がいます。だから、私は命を大切にしたい。

今、世の中はコロナウイルスで不安な状態で、生活苦、難病、いじめなどで、自らの命を絶つ人が絶えません。どんなに苦しくても、どんなに辛くても、自分で自分の命を絶つことは絶対にしてはいけないと思います。家族が、友達が、自らの命を絶ったなら、残された人たちはどんなに悲しむことでしょうか。

私の祖母は、大学時代の友人が、23 歳の若さで自殺してしまったそうです。その時の両親の悲しむ姿を見て耐えられなかったことを話してくれました。

悩み、苦しみ、闇の中にいる人に伝えたいことがあります。周りを見回してみてください。あなたを

愛する人はきっといます。誰かにその苦しみを話してみてください。決して一人で悩まないでください。

私も悲しみに心がこわれそうになったことがあります。私にとって、中学受験は人生初めての試練でした。志願校合格に向けて数年間努力してきましたが、実力を発揮することが出来ず、憧れていた第一志望の学校の試験に失敗してしまったのです。その時は、両親に話し、涙で悲しみを洗い流しました。

家族と話し合い、インターネットで調べて自分に合った中学に進学することを決めました。良い友達や先輩、先生方と出会うことができ、自分の選択は間違っていなかったと確信しています。

これから何度も壁にぶつかることがあると思います。その時は、両親や友達に悩みを打ち明け、心を軽くします。誰かに話すことで心は軽くなると思います。そして、強い心で自分の目標に向かって歩いていきます。池江さんがオリンピック出場を決めたレース後の言葉「努力は必ず報われる」を胸に、一步一步、前を向いて歩いていきます。

私達は世界で唯一無二の存在です。あなたに代わる人はいない。かけがえのない存在です。

自分を信じて、恐れることなく、堂々と前を向いて歩いていきましょう。輝かしい未来に向かって。